

虹と日本文藝(十二) 続

——中古散文(付日本漢詩)をめぐって(2)——

萩野恭茂*

小序

本稿は、前稿「虹と日本文藝」(十二)——中古散文をめぐって(1)——に続くもので、大作『源氏物語』をとりあげ、そこに現れた〈虹〉、具体的には「白虹貫日」について、また「れいにたかへる月日ほしのひかり」「天人・天女」「夢のうきはし」の問題にも比較文化的見地を混えつつ、資料ごと個別的に小考を試みたい。付載として日本漢詩『菅家文章』『和漢朗詠集』『本朝無題詩』『本朝麗藻』をとりあげ〈虹〉と関連する問題にアプローチする。

85

月やうくさしいて、おかしきほとなるにあそひなともせまほしきほとかなとのたまはず中宮のこよひまかて給なるとふらひにもし侍らむ院のたまはせ

廿日の

をく事はへりしかは又うしろみつかうまつる人も侍らさめるに春宮の御ゆかり
いとおしう思給へられ侍てとそうし給春宮をはいまのみこになしてなどのたま
はせをきしかはとりわきて心さしものすれとことにさしわきたるさまにもなに
事をかはとてこそとしのほとよりも御てなとのわさとかしこうこそものし給へ
けれなにことにもはかしくからぬ身つからのおもておこしになむとのたまは
すれはおほかたし給わさなといとさとおとなひたるさまにものし給へとまた
いとかななりになとその御ありさまもそうし給てまかて給に大宮の御せうとの
藤大納言のこの頭弁といふかよにあひはなやかなるわか人にておもふ事なきな
るへしいもうとのれいけいてんの御かたにゆくに大將の御さきをしのひやかに
をへはしはしたちとまりて白虹日をつらぬけり太子をちたりといとゆるらかに
うちすしたるを大將いとまはゆしとき、給へとかむへき事かはきさきの御け
しきはいとおそろしうわつらはしけにのみきこゆるをかうしたしき人ともけし
きたちいふへかめる事とももあるにわつらはしうおほされれとつれなうのみ
もてなし給へり

——線は稿者による

私註(一)『源氏物語』(二)「さか木」(三)物語(四)長保五年(1008)この頃少なくとも一部は流布。(五)紫式部(通説)(六)池田亀鑑編『源氏物語大成』巻一(昭和28・6、中央公論社)(七)P361、P362(八)校異・「白虹——白虹(虹)——青表紙本系大島本」(——は見せ消ち)、他はナシ。

〔考〕「賢木」の巻は、源氏二十三歳の九月から二十五歳の夏までの期間にあたる。ここでの「大将」は源氏である。『源氏物語』のテーマ・構成を、王氏と他氏とのダイナミックなうねるような相剋展開の相としてとらえるとき、この所は、両者のコンタクトによる火花の散る様な場面である。そして、源氏のライバルの側の若者・頭弁が、しばし立ち止まりて、ゆるやかにうち誦した「白虹日をつらぬけり太子をちたり」の詞句は『後漢書』に見える春秋時代の話「白虹貫牛山」(cf. ⑪)をそのルーツとし、『史記』・『漢書』を源とする「白虹貫日 太子畏之」の和訳である。この前に「昔者 荊軻慕燕丹之義」があり、これを響かせている。しかし、両者間、次元もケースも、内容さえも異なる(④)の私註参照。ゆえにぴったりといふ筈もないが、あえて、表面的に、牽強付会してみるならば、太子⇨春宮、荊軻⇨源氏(⇨白虹の面)、始皇帝⇨今上(⇨日)に擬し、今上を廃し、(作者は、王権のタブーを犯す極秘の恋を讀者に暗示しつつ——※頭弁はこの秘密を知る筈はないから——)藤壺の生んだ春宮を立てんとこの野心を推察しつつ、「朧月夜との密通の噂もからめて)そんなにはうまくいかないよ」との意を含ませた辛辣で冷笑的なあてつけの振まいを描いている。

これは、初巻「桐壺」の巻の、「かしこき高麗人の相人の観

相、「國の親となりて、帝王の、上なき位にのぼるべき相おはします人の、そなたにて見れば、亂れ憂ふることやあらん。朝廷のかためとなりて、天(の)下助くる方に見れば、又、その相たがふべし」(岩波・大系本)とも伏線的に微妙に関連している。

すなわち、作者の中国的教養、当時としては外来のハイカラな、いわゆるますらをぶりの教養が、柔らかな和文脈に変容されて、『源氏』の世界に見事に溶合しつつ重々しいメタファーとして作動しているのである。

ここで、中国古代の文献と比照してみるに、「……太子畏之」まで出ているものは、『史記』(⇨④)・『漢書』(⇨⑤)⇨④の私註に含む)であり、『資治通鑑』『戦国策』(⇨④)には「太子畏之」が見えない。選文・類書では、『文選』(⇨⑥)、『初学記』(⇨⑩)、『太平御覧』(⇨⑪)にあり、『北堂書鈔』(⇨⑧)、『藝文類従』(⇨⑨)には見えない。

さて、次に、作者(紫式部)の側から少しく考察してみたい。当該箇所を、場面に即した文脈に沿って鑑賞すると、内容的に見て、

白虹貫日太子畏之 ⇨ 白虹日を貫けり太子をちたり

原典・『史記』『漢書』 ⇨ 『源氏物語』
となる。(④)私註参照

A これを踏まえると、作者が、

A 原典をきちんと読解していた場合

① 表現上故意に歪曲して取り入れた(その場限りの引用)
② 故意に誤読して、それを若い頭弁に言わせ、その無

知さかげんを皮肉った

B 原典を読むには読んでいるが「誤読」している
C 『文選』・類書等二次資料すなわちダイジェスト版により、それに直結している

のケースが考えられる。A-①に近いものに小守郁子説（『源氏物語における史記と白氏文集』）があり、A-②に近いものに玉上琢弥説（『源氏物語評釈』）が、Bに近いものに、鈴木辰説があり、『玉の小櫛補遺』に「作者本書の意をすこし心得たがへたりと見ゆ」（※『源氏物語湖月抄』注にも取）とある。A-②とすると、「とがむべき事かは」の「とがむ」の語意中に一部その原因が混入する場合もありうることになる。ややC説——特に『文選』との関連——が優位のような気がするが、本個所について、もともと中国でさえ様々な注が存する〔4〕〔6〕参照）ので、紫式部とはいえ、B説ではないという保証はなからう。

さて、〈虹〉は、現実には、史上どの時代にもたっている。そのことは、『古事類苑』等の記述が示す通りであり、言語的に見ても、すでに上代より古辞書・類書にその語は見える。にもかかわらず、〈虹〉の文藝に及ぼしている面よりすると、この場合、あくまでも先進外国文化（中国）の理知的応用であり、広大な『源氏物語』の世界に、それも秀れた自然描写の多いこの世界に、これ以外一度も明らかに（虹）として素材に使われていないこと、それ自体奇怪な享受の仕方のように思える。

これは、『古今』より『新古今』まで、勅撰八代集の和歌の世界に〈虹〉の歌が一首もないことや、白楽天の「長恨歌」に

心酔していたらしい作者が、青海波の舞は出しても、「霓裳羽衣」の舞は出さず、また、現実に平安時代、この舞が一時禁止されていること（〔16〕私註参照）等——とも呼応している特殊な心理的作用によるものと思える。

因みに、戸田栄次著『源氏物語と枕草子の月・雪・雷』（昭和57）によると、『源氏物語』の天文語は、全篇に、日月星雪など十八あり、千二百四十六回も使用されている。という。逆説的ではあるが、〈虹〉以外の自然現象はそれほど素材化されているのである。

ここに至って、『源氏物語』作者の〈虹〉観——特に作者が女性であるゆえに、筆に乗せるのもおぞましい不吉・妖祥・邪淫観——に支配されていたであろう事に、当然といえれば当然のことながら思い当るのである。

〔注1〕 拙稿「虹と日本文藝（十）」——日本辞・類・音義書史上主要文献私註——御参照。
〔注2〕 資料〔1〕（『詩経』）並に〔5〕（『漢書』参照）

852

おほかたよのなかさはかしく
ておほやけさまにもゝさとししけくのとかならてあまつ空にもれいたかへ
る月日はしのひかりみえくものたゝすまひありとのみ世の人おとろく事おほく
てみち〜のかむかへふみともたてまつれるにもあやしく世になへてならぬ事
ともまじりたり内のおと〜のみなむ御心のうちにわつらはしくおほししらるゝ
事ありける

私註 (一) 『源氏物語』 (二) 「うす雲」 (三) 物語 (四) 前同
 (五) 前同 (六) 前同 (七) P 614

〔考〕 この資料は、文面上には〈虹〉の語と、〈虹〉の姿は見えない。しかし、異象・妖祥としての〈虹〉のかげが暗に仄見えているように思える。すなわち、この中の「例に違える月日」が、月食・日食の他、〈虹〉の「貫月」・「貫日」現象をも包み込んでいる可能性はあろう。しかし、これとして自然的享受の存在ではなく、多分に卜占的存在である。つまり、天文的異変の根本は、地に在ってそれが天に上って発現する、という陰陽道に儒教思想のミックスしたものをベースとしており、具体的には、源氏と藤壺との秘められた恐るべき不倫・密通事件と関係させている。(資料 5) 《『漢書』〔考〕》参照) また中国古代の緯書にみられるさまざまな所謂「〈虹〉の感生帝説」^(注1)は、『源氏物語』の今上帝の出生の秘密とも微妙に絡みつつ、その深層において生きついでているようである。

〔注1〕 例えば「貫月生瑣」、「意感生帝舜」(cf. 『太平御覽』 11)

85

〈天女・天人〉

きち上¹天女をおもひかけむとすればほうけつきくすしからむこそ又
 わひしかりぬへけれとてみなわらひぬ …… (a)

なにかしのみこの花めてたるゆふへそかしいにしへ²天人かけりてひ
 わの手をしへけるは何事もあさく成たる世はものうしや …… (b)

一とせたらぬつくもかみおほかる所にてめもあやにいみしき³天人の
 あまくたれるをみたらむやうに思ふもあやうき心ちすれと …… (c)
 こくらくといふなる所にはほさつなともみなかゝることをして天人
 なともまひあそふこそたうとかれ …… (d)

私註 (一) 『源氏物語』 (二) (a) 「は、き木」 (b) 「やとり
 木」 (c)・(d) 「てならひ」 (三) 物語 (四) 前同 (五) 前同
 (六) 『前同』 卷一 (a) (b) (c) (d) (七) (a) P 58
 (b) P 1766 (c) P 2003 (d) P 2017
 〔考〕 『竹取物語』 (182) の所でも触れてきたが、「天人」・「天女」
 は、〈虹〉の二次的認識による〈イリス型〉 (131) (a) によるものである。たとえそれが、仏教的場面で語られたもの
 であっても、仏教、広い意味で文化形成以前の淵源的存在な
 のである。これは「龍」系とは別系統で生長してきたものである。
 識別ポイントの一、二は「美」と「致福」である。(a)は例
 の「雨夜の品定め」中の頭中将の言にみえるものであるが、岩
 波日本古典文学大系の注にもあるように「顔が端麗で、大衆に
 大功德を与える天女。毘沙門天の妹という。」まさに〈虹〉の
 化身である。(b)・(d)は「音楽的」な面で功德を施す存在、(c)は
 「この世のものとも思えぬ美しさ」の比喩である。
 ただし、表面的に〈虹〉が出てこないのが、作者はたぶんそ
 れと気づいてはいまい。〈虹〉の秘めやかな貢献である。

85

夢のうきはし

私註 (一)『源氏物語』(二)「夢のうきはし」(三)物語(四)前同(五)前同(六)池田亀鑑編『源氏物語大成』卷三(七)P 261

〔考〕「夢のうきはし」は、壮大にして優艶なる大河文藝『源氏物語』五十四帖の掉尾を飾る帖の名である。それはこの一帖の内容を象徴する帖名であると同時に、宇治十帖の、否、『源氏』の世界全体をも包括した構成の中の大団円の象徴でもありえよう。

この結帖については先学によってさまざま(註一)な考察がなされてきたが、稿者が意図する考えを述べるに際して、新聞一美筆「源氏物語の結末について——長恨歌と李夫人と——」(註二)は、すこぶる有効のように思われる。よって御学恩に浴しつつ次に抄引させていただく。それによると、

夢浮橋巻の末尾は、表氏の言われるように、長恨歌の物語をふまえることよって桐壺・幻巻と呼応し、源氏物語全体の結末を表示したものと思われる。

(また)

世俗的に一度死んだ浮舟は小野という天界に生まれかわり、出家することよって一旦恩愛の情を断ち切る。しかし小野の地は極楽浄土ではなく、人界(都)に輪廻することもあり得るのである。事実、薫の使いの小君が都から尋ねて来て、

浮舟に恩愛の情を起こさせようとする。使いを受け入れれば再び人界に輪廻し、煩惱の世界で身を焼かねばならない。こは阿弥陀仏の力にすぎり、浄土に往生するために使いを拒絶しなければならぬであろう。

薫についてはどうか。「長恨歌伝」・「長恨歌序」・「楊太真外伝」等は、その物語の最後に、方士の還奏を受けてなお嘆き悲しむ玄宗の姿を描写する。源氏物語も「思すことさまざまにて」という惑える薫の姿を描いて終っている。仏の力にすがろうとする浮舟と、仏の世界に接近しようとしていながら惑い続ける薫と、源氏物語の作者は深い対比をその結末に意図しているように見える。(——線は稿者)

とある。また、山岸徳平校注『源氏物語』五——岩波日本古典文学大系18——には、

書名 本文中、言葉にも和歌にも、「夢の浮橋」の語は出ていないが、「夢」の語は、五回見られる。

- 一 夢の心地して
- 二 夢のやうなる事ども、
- 三 夢のやうなり
- 四 世の夢語をだに
- 五 いかかりける夢にか

とある。

さて先引の『記』『紀』に登場した「天浮橋」が稿者のいう〈虹〉の二次的認識による「橋」見立て型(Ⅱ—□—(ロ)—a)³の発想によるもので、いわばメタファの文藝手法による〈虹〉の異名に近いものであり、これが「人間界」と「天界」との〈架橋〉であることは、海外の数多の古代世界の〈虹〉を見てきた目にはほぼ無理なく首肯されうるものであった。とすれば、言葉的にはよく似た本ケースの「夢のうきはし」の場合

どうか。

「夢のうきはし」は「薄雲」の帖に「夢のわたりの浮橋」の類語を有するも、厳格には日本文藝史上『源氏物語』が嚆矢^{（注）}であると思われる、従って『源氏』の作者の造語であろう。とすれば稿者としては、稿者の立場からもう少し考察を深めてみたい。

まず稿者は、『源氏』未完説を許容しない。直観的であるが漱石の『明暗』のごとくには感じられないからである。まずもってこの足場を前提とすれば、この「夢のうきはし」に壮大・優艶な『源氏』の世界を構築せしめた作者の、「文藝的感性」と「人生哲学（洞察）」によって織りなされた究極の想いが込められているはずである。

ここで作品世界に戻ると、新聞論文にいう「小野」を「天界」の喩的空間とすれば、稿者としては同論文にいう仏教的「浄土」も別次元と考えず、つまり「異界」の意味において「天界」と同質のものと考えてみたい。

とすれば、この「橋」は、(A)「人界Ⅱ地上」より(B)「浄土Ⅱ天界」への架橋と考えることができる。仏教的に言えば「解脱への通路」である。これを『源氏』世界の具象でいえば、(A)の象徴たる「宇治」と(B)の象徴たる「小野」ということになる。この舞台の間を結ぶ具象的象徴として、さらに文藝的描写技法でいえば、はるか宇治十帖の初帖「橋姫」の「橋」のイメージの残像を享けつつ、幻写法的に、名高い川霧のたち込める朦朧の中の「宇治橋」を夢幻的に読者の脳裡に浮かびあがらせる。（この手法も見事である。）繰り返して強調しておくが、この橋こそA・B間の架橋なのである。そしてそれを渡って帰ろうとしない浮舟にとっても、実は後ろ髪引かれる「つらい」

橋であり、それを渡るべく意思を持ちながらも渡りえない薫にとっても「つらい」橋である。よってこの所を、「浮き」に「憂き」を重ねた懸詞、すなわち成熟した和歌的修辭を援用したのである。そのイメージには「景」と「情」の美しい融合がある。

次に「夢の」であるが、これはこの帖中に多出する「夢」の語の残像的連鎖の効果をねらいつつ「はかなさ」を暗示する表現であろう。それは「消える」こともある「はかなさ」である。

ここに至って『記』『紀』の「天浮橋」が想起されてくる。通説に従って、この宇治十帖をも含めた『源氏』の世界の創造者を紫式部とすれば、——日本紀の局とニツクネームされたことをも考えれば、『古事記』でなく『日本書紀』よりの「天浮橋」についての教養の導入の可能性があらう。そして、式部が読み強い感銘をえたであらう「天浮橋」は、天と地を繋ぐ橋であり、神・精霊・魂の昇降する通路であった。また、中国古代の陰陽道の観念の混融をみると、それは陰陽の接点として、男・女の魂または肉体の結合状態の象徴でもあった。それは〈虹〉を淵源とし、始原とするものであった。それはグローバルに見られた文化的パターンの一端として解された。

「夢のうきはし」は、この「天浮橋」を、『源氏物語』の世界にマッチさせるべく、みごとに脚色してみせた含蓄の深い、作者の造語であらう。

この所をもう少し事態に沿って私註的に記述するならば、典拠とされたと思われる「天浮橋」は、機能的に言えば、「白鳥処女説話」の混融した天女伝説的話型の中の素材たる「羽衣」に相当する。すなわち、地上、人間界・俗界よりの「解

「脱」の手段であり、よってそれを「渡る」または「著衣」すれば、地上界の人でなくなり、従って懊悩はきれいに消え去るはずのものである。しかしこの「夢のうきはし」は、これを思い切つて渡り切つてもなお、完全には消え去ることのない人間の愛執の付着を許しているものである。（これは作者の「あはれ」を感ずる優しきの照射力の介入によるものである。）ここが古物語のパターンに属する『竹取物語』の「かぐや姫」の「羽衣」と質的に違う所である。「浮舟」が、天女の発想により造型された女人像であつたとしても、「かぐや姫」との質的相違がここにある。

これはいいかえれば『源氏物語』的文藝哲学の発露であり、作者の文藝的創意のたまものである。

巻末として限定された帖名としての「夢のうきはし」としてみれば、——川霧の朦朧の中に浮き上る夢幻的美しさをもつ宇治橋の「景」を暗示しつつ、「情」一面では、浮舟・薫、両者の「つらい」心の架け橋——異界に架かる橋——であると同時に、それを思いやる作者の優しい心が見つめる時に発動する「憂き」橋でもあろう。

さらに『源氏』五十四帖の結帖としての重みの中にある「夢のうきはし」としては、——その壮大・優艶な美的世界を構築した作者の、秀れた「文藝的感性」と「深く広い人間洞察」のみごとに混融したもので、仏教の輪廻の論理では捉えきれない俗界よりの「解脱」の可能性¹¹フ、アジ、性、余情性、の《美的表象》であらう。

そこには人間の原罪を優しく見つめる「あはれ」の心眼と、その原罪ゆえ（虹）のように消えるかも知れない、「夢」のよ

うに覚めるかも知れない「はかなさ」——男・女の魂の離合の可能性——をも知る厳しさが暗示されている。かく、「天界」と「人界」とを繋ぐ「夢のうきはし」をはさむ「俊巡」は、作者・紫式部の「心の宇宙」の究極の象徴であると同時に、人間の心的宇宙の究極の象徴でもあろう。天人の心と人間の肉体を同時に持つ存在としての……。

（虹）の文化は、かく変身しつつ『源氏物語』の中枢にも深く食い込んで、その美的世界の構築に貢献しているのである。

作者の（虹）の文化的享受のスタンスは、⁸⁵1—⁸⁵2と⁸⁵3—⁸⁵4との間にかなりの隔たりがみられる。すなわち、⁸⁵1—⁸⁵2は、中国古代的教養による不吉・妖祥観に彩られたマイナス志向のものである。⁸⁵3も「うき」¹¹（憂き）を強調すれば、ややそちらに傾いて見られないこともないが、やはりそこに大きな断層があるようである。おどろおどろしいまでの感はない。

これは、『源氏物語』を一筆、つまり同作者（紫式部）と仮定すれば、作者に親密であつた『日本書紀』の「天浮橋」が、実は（虹）の二次的認識による（橋型）発想（¹¹〔二〕—〔a〕³）であること、また、「天人」・「天女」が（イリス型）発想によるものであることに、表層的には気づいていなかったことによるう。

しかし、その深層は、さらに中世の天才歌人・藤原定家に遺伝してかの名歌を生ませることになる。

（注1）山岸徳平校注『源氏物語』五——日本古典文学大系18（昭38、岩波書店）の補注六〇九に「夢浮橋」についての注釈の蒐集がある。

(注2) 『國語國文』第四十八卷第三号(昭54・3) 所収。

(注3) 『伊勢物語』『大和物語』『竹取物語』『宇津保物語』『落窪物語』『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』『後拾遺和歌集』を調査。「夢の浮き橋」不見。

(注4) 参考——佐藤厚子筆「もう一つの『竹取物語』——浮舟の物語——」(物語研究会編『物語——その転生と再生』有精堂、所収) ただし、本論文は、主に文化的視座より論述のため、稿者とは所々に位相的差異がある。

(注5) 守覚法親王、五十首歌よませ侍りけるに
春の夜のゆめのうき橋とだえして峰にわかるる横雲のそら

(新古今和歌集・春上・三八)

参考

『源氏物語大成』巻四——索引篇——(昭46、中央公論社) によると「おふさ」「をふさ」「龍」をあらわす「たつ」はナシ。「龍」は「手習」に一つあり、仏教の「龍女成仏」を喩として援用したものの。従って「龍女」はマイナス認識である。『古事記』序文中の「潜龍」とは逆。

86

賦三得赤虹篇、一首。
七言十韻、自此以下四首、臨應進士學、家君
毎日試之。雖有數十首、探其頗可觀留之。

陰陽燮理自多功

氣象裁成望赤虹

舉眼悠々宜雨後

廻頭渺々在天東
炎涼有序知盈縮
表裏无私弁始終
十月取時仙雪絳
三春見處天桃紅
雪衢暴錦星辰織
鳥路成橋造化工
千丈綵幢穿水底
一條朱旆掛空中
初疑碧落留飛電
漸談炎洲颺暴風
遠影嬋娟猶火劍
輕形曲撓便形弓
如今尙是樞星散
宿昔何令貫日忽
問著先爲黃玉寶
刻文當使孔丘通

私註 (一) 『菅家文章』(二) 卷第一・通算4番目(三) 日本漢詩(四) 貞觀三年(861) ごろ(五) 菅原道真(六) 川口久雄校

注『菅家文章 菅家後集』——日本古典文學大系72——（昭41、岩波書店）（七）P107・108（八）底本Ⅱ明曆二年藤井懶齋與書三冊青表紙本（校注者架蔵）道真17歳の時の作。

〔考〕道真若干十七歳、文章生登用の試たる「進士の拳」の折、父・是善が家において課した模擬テスト様の試作中の一篇である。（六）本補注に「語彙・措辞はきらびやかであるが、内容はそれほどものではない」とあり、それはそうであろう。そのことより、初の登龍門突破の試作に〈赤虹〉すなわち〈ニジ〉を一つの素材に選び、それが比較的出来のよいものである所に作者の感性の特色をみる。後に天神とうたわれたことと思ひ合わせてみると興味深い。

『佩文韻府』・『駢字類編』（Ⅱ21）には、〈丹虹〉〈絳虹〉はみられるが〈赤虹〉はみられない。しかし、類書例えば『初学記』（Ⅱ10）には、

「赤虹自上而下、化爲黄長三尺、上有刻文、孔子跪受而讀之、」
とあり、〈赤虹〉の故事がみられる。若い道真の詩作のための中心的情報資源は、おおむね中国の類書類であり、それに古詩・唐詩の教養が加わり、その上に作者自身の詩的創意の肉付けがある。

〈赤虹〉の形状描写も「橋」「幢」「旃」「暴風」「弓」の語彙を援用しているが、類似発想は『楚辞』（Ⅱ2）以来見られるものである。

そして〈虹〉への道真の対峙の仕方は、美的、特に「壮美」「爽美」と観じつつ、——妖祥・不吉観とは無縁で——、プラス志向で成されている。若き道真の心の宇宙の〈虹〉の許答法である。

〈虹〉の秘めた「致福力」を示す結部終り三行の援用と見解にそれが象徴されている。

862

早春、侍宴仁壽殿、同賦「春暖、應製」。并序。

春之爲¹氣也、霏²焉、漠³焉。鸞瓦雪銷、見⁴天下之皆⁵就⁶暖、鳳池
水治、知⁷天下之不⁸受⁹寒。時也翠幌高開、珠簾競¹⁰撥、留¹¹三万機於一日、
翫¹²三春於二旬。非¹³彼恩容侍臣、勅喚¹⁴文士、未¹⁵曾清談遊宴、夢想追歡¹⁶者乎。
既¹⁷而金箭頻移、玉盃無¹⁸算。紅衫舞破、所¹⁹綴者後庭之華、朱吻歌高、
所²⁰退者行雲之影。猗靡、其爲²¹外也、風月鶯花、其爲²²內也、猶羅脂粉。
一事一物、皆是溫和。相送相迎、靡²³非²⁴照²⁵。小臣解²⁶形俗人、取²⁷樂
今日²⁸一將²⁹、詳³⁰盛事於瓊窓、選³¹誠³²不言於溫樹。嗟歎³³不足、略而敘
之云、尔、謹序。

春風聖化愜陽和
初出重闈露布過
語鳥千般皆德照
游魚万里半恩波
虹霓細舞因晴見
沈瀛流盃向晚多
日落先歸何恨苦
儒生不便于廻戈

私註(一)『菅家文章』(二)卷第二・通算79番目(三) 86と
同(四)元慶二年(873)ころ(五) 86と同(六) 86と同
(七) P 169・170(八) 底本 86と同。1〜24の校注略。——線
は稿者による。道真34歳の時の作。

〔考〕「虹霓細舞」とあるが、「霓裳羽衣」の曲・舞の風情をい
うのである。これが、空にかかった(ニジ)を見ての詩的表
現なのか、(一六)本の頭注にあるように、宮女の舞いの矚目よ
りの写生なのか定かではない。仮りに後者とすると、この舞曲
は、遠藤実夫著『長恨歌研究』(昭9、建設社)によると、「仁
明天皇の承和年間に伝来した霓裳曲は泰平の世相と唐化熱の盛
期に会して少なからず流行したものだと思われる。然るに当時疫
病流行して人民百姓の死亡する者が続出したので公卿僉議の結
果、これ全く霓裳曲の故であると評定あつてこの曲を奏するこ
とを停められ、次代文徳帝の御代までは殆ど舞はれなかつたけ
れども、清和帝の貞観二年六月十日之を内教坊に賜つて奏でし
められたが、この度は別に凶い事も起こらなかつたので、爾来
正月の節会にはこの曲を奏することになった(龍鳴抄)」とい
ういきさつがあつた。本詩成立の頃は、清和帝に続く陽成帝の
御代であるから当然解禁になつていたはずである。ただしその
実体は「細舞」の表現にみるくらいで皆目わからない。想像図
としては、資料16私註の《影印8》参照。
また「虹霓細舞」が、空にかかる美しい(ニジ)の喩であ
れ、宮女の舞いの写真であれ、あるいはこれを幻想しての仮構
であれ、(ニジ)の文化が、日本の宮廷サロンに集う作者を含
む殿上人らに、優艶なる美的至福を提供していたことは確かな
ようである。

「霓裳羽衣」の舞・曲に関しては、資料16ならびに私註参
照。

87

一聲鳳管 秋驚秦嶺之雲

數拍霓裳 曉送緱山之月

連昌宮賦

(——線は稿者)

私註(一)和漢朗詠集(二)卷下・「管絃」・462番(三)朗詠集
(四)平安時代中期(1088ころ)(五)藤原公任(990〜
1041)(六)川口久雄校注『和漢朗詠集』——日本古典文學大
系73——(昭40、岩波書店)(七)P 167(八)底本 御物伝藤
原行成筆粘葉装二冊本倭漢朗詠集「霓裳」は注に「唐書、礼
樂志に楊敬忠が献じた霓裳羽衣の曲。」とある。
〔考〕(六)本の頭注に「私注『連昌宮賦 公乘億』。連昌宮は
洛陽の諸宮の一つ。玄宗が東都洛陽において管絃の遊びをした
時のさまをよむ。連昌宮夜宴のさま。」とある。「霓裳」は「霓
裳羽衣の舞いの伴奏のリズム」であるが、擬人化されている。
「霓裳」関係は白楽天の詩に出するもので、資料16の私註に譲
る。本詩は日本文藝に馴染み深いものではあるが、日本文藝そ
のものではない。しかし、公任が白楽天の「霓裳」を採らず本
詩の「霓裳」を採った所に審美眼の特性という意味で意味があ
ろう。

A

大江匡房

大厦新排以落々。降登飲宴（降登）悉開眉。凌雲壯麗
人輸節。不日新功君與時。雲雨半過生三戸牖。
虹霓纒及遶（纒）夢楹。周年路寢漢前殿。舊製相同
誰不（不）思。

B

藤原知房

新成大厦接星躔。製象紫微契萬年。四面
壁躡高映月。千尋畫柄半承天。虹霓勢巨華
梁聳。燕雀賀來繡楹連。壯麗何唯良匠力。宏
基便出我君賢。

C

藤原敦基

禪庭深處隔塵寰。盡日廻眸眺望遙。斷峽虹橫
春雨後。遠村煙細夕陽間。風來拂砌唯花樹。晴
至入樓幾碧山。林下新逢槐露暖。剝哥德澤
醉中還。

D

源經信

挿峯跨澗一蕭寺。秋景攀登瞻望遙。山雨初飛
歛（歛）蝮蟠。溪風乍起裂芭蕉。石翁松老蓋空槭。
苔壁書殘字半消。暫入禪窓塵慮斷。還欣閑伴
偶相招。

私註〔一〕『本朝無題詩』〔二〕A・BⅡ卷第一「宴賀 賀大

極殿新成。」C・DⅡ卷第八「山寺上」〔三〕日本漢詩〔四〕

平安末期〔五〕藤原忠通（説）〔六〕『群書類従』第九輯——文

筆部——（檢校保己二集）（統群書類従完成会）〔七〕A・BⅡ

P2・3 C・DⅡP89・95〔八〕Dは久保田淳筆「虹の歌」

〔『文学』二一3、岩波書店〕に堀川貴司氏の教示として先引。

〔考〕Aの第6連は、『文選』（Ⅱ〔6〕①②）にも見える、名高い

「西都賦」（班固）を下敷きにしたもので、勿論美景の写生では

なからうが、半ば（ニジ）の一時的認識（動物的、蛇的）が混

融した表現ではある。また、ここにいう（虹霓）は、本来の意

の雄・雌の二匹の意ではなく、単に（ニジ）をいうのである

う。そしてこの（ニジ）は、大極殿の再建の完成を慶祝する

——というモチーフに沿いつつ大いにプラス感覚で把握されて

いる。

B第5連は、現実の（ニジ）の写生ではなく、いわば（ニ

ジ）の如く美しく且つ威勢よく見える、建築用語にいう（虹

梁）の壮麗を謳いあげつつ、御殿全体の結構の讚美に供するた

めのメタファーであろう。（虹霓）の感覚はほぼAに同じ。

Cの（虹）は、擬人法的修辭に駆使されて、脱俗の詩界の中

に春胎蕩の気を醸成すべく効果あらしめている。

D第3連中の「歛」の表現がユニークでありシャープであ

る。（蝮蟠）（cf.〔9〕—〔考〕）は、『詩経』（Ⅱ〔1〕）の表記では

「蝮蟠」であるが、三〇〇年ほど時代を下る中国南方系文化

の「蝮蟠」であるが、三〇〇年ほど時代を下る中国南方系文化

を担う（虹霓）に対する北方系の語で、（ニジ）を意味する。従って（虹霓）を避けたこの（蝶蝮）の語の援用は、その古風で寒々とした語感が、本詩の、さびさびとしたセピアムードの秋景を演出するのに見事に貢献している。よってABCとは趣を異にするが、といって決してマイナス感覚（不吉・妖怪・淫乱等）によっているわけではない。

88₂

池水繞橋流_{以情爲韻}

源相公頼定

前池形趣本傳名。流水繞橋入夏清。旅雁一行秋漢潔。長虹千里暮雨晴。魚驚左右紅欄影。人踏東西白浪聲。此處風烟非俗境。宜哉久契勝遊情。

私註 (一)『本朝麗藻』(二)卷上 (三)日本漢詩 (四)平安中期 (1010ころ) (五)編者||高階積善、作者||源頼定 (977-1030) (六)『群書類従』第八輯——文筆部——(統群書類従完成会) (七) P 586 (八)『北陸古典研究』第6号 (1991.9) 中、金沢大学教養部内北陸古典研究会の柳澤良一の筆になる『本朝麗藻』試注 (六)に「◆長江千里||千里にも及ぶほどの長くかかった虹。ただし前句同様これも実景ではなく、美しいアーチ状の弧線を描く橋の比喩。『白氏文集』卷五十四・二四九五(河亭晴望、九月八日)「晴虹橋影出、秋雁櫓声来」。『詩法掌韻大成』「長江 長橋也」。」とある。

〔考〕注引の『白氏文集』については、本研究中の16||『白居

易集』参照。本詩も中国の影響、すなわち中唐の詩人・白楽天の影響は明白であるが、拙稿にいう（虹）の二次的認識たる「橋」型発想を、現実の橋の叙景の中に喩として融合させたものである。

12……は、『椋山女学園大学研究論集』連載中の資料の通し番号である。

* 文化情報学部 文化情報学科